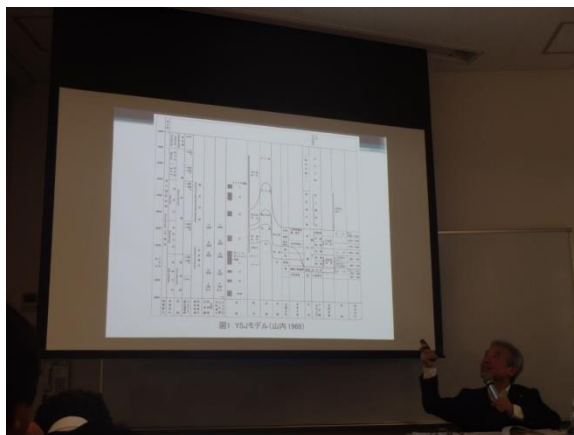


早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門
「社会の複雑化・階層化の史的パースペクティブ」主催

第1回公開講演会「社会の複雑化と縄文時代研究」報告書

日時：2015年10月31日（土）14：00～17：00

場所：早稲田大学戸山キャンパス 31号館 104教室



【経過】

●14：00～14：10

開催。冒頭に大網信良（早稲田大学文学学術院助手）より開催趣旨の説明があった。

●14：10～15：40：

講演会。大塚達朗氏（南山大学人文学部教授）により「縄文式階層化社会」の意義を考えるー縄紋文化の脱構築のためにー」と題するご講演をいただいた。

●15：50～16：40：

質疑応答。若手研究者や学生からの質疑が多く、今後の縄文時代研究の発展が期待された。

●16：40～17：00：

高橋龍三郎（早稲田大学文学学術院教授）より講演に対するコメントがあった。

参加人数：30人

【概 要】

今回の講演において大塚氏は、縄文土器研究の今後の指針を示すために、大きく二つの研究課題を提示した。

まず一つは、縄文土器の社会的機能に関わることである。晩期・亀ヶ岡式土器の移入と模倣のモデルから、縄文時代における土器が、高度工芸品として一定の社会的価値を備える物質文化であることを明らかにし、それを支える社会システムが高級狩猟採集民（Complex Hunter-Gatherer）への複雑化を促したことを改めて指摘した。

二つ目は、縄文時代の文化認識に関わることである。これまで「縄文文化」は、縄文土器が出土する時代と定義され、約 13,000 年間にわたって日本列島にあまねく分布する一続きの文化とされることが一般的であった。しかし大塚氏は、草創期・隆起線文土器段階の検討を通じ、①生態学的適応の結果として生じる文化設定、②古地形を考慮した物質文化の伝達と展開、という二つの視点から既存の「縄文文化」という概念を解体、すなわち「脱構築」すべきという提案がなされた。

同時に、講演においては、大塚氏のこれまでの研究もさることながら、山内清男氏や渡辺仁氏の研究成果を今日的課題に照らして理解することに重点を置いており、考古学研究において先行研究を検討することの重要性を再認識させる貴重な機会でもあった。

講演を受けた高橋のコメントでは、縄文時代は、これまでの研究により時期・地域に応じて社会システムが異なることが明らかであるため、複雑化や階層化を一様に敷衍するのではなく、実態に即した形でトランスエガリタリアン理論などのモデルを適用し、それを蓄積することで当時の社会を明らかにしていく試みが重要とし、今後の研究を担う若手研究者へ、目的意識をもった土器研究を要請した。

（文責：高橋龍三郎）

（とりまとめ：張 勝蘭）